

古今集の修辭

尾 上 柴 舟

一

平安朝時代の歌の、眞に平安朝時代のものといふ烙印を打ち得るのは、いはゆる延喜時代からであらう。その以前乃ち延暦の初ごろから延喜の直前ごろまでは、奈良朝時代の餘勢で、歌に多少の新生面が開かれてゐること、恰も業平、小町等の作のやうなものであるが、大體は、猶古今集中の「讀人知らず」の體であつたと想像せられる。それらは、萬葉集中の近代の特調を帯びてゐるものと甚しい差異はない。後の事ではあるが、賀茂眞淵は、晩年には、萬葉集中の歌の模倣時には記紀の歌の模倣を止めて、この讀人知らずの類を範としてゐたといふ。古代憧憬の強いその人も、あまりにその模倣作が古代過ぎるのに驚いて、否實世間とあまり懸け離れてゐるのに驚いて、遂にこゝまで目標を下して來たのであるが、猶固執してゐる古代の、大まかで、粗いながら、至純な情趣を多分に持ち、しかも近代的の理智的な色と匂とを少しづつ著けてゐるこの時代のもものは、畢竟、古代のそれとあまり異ならないのであるから、これを目標にするのは、そこに多少の矛盾はあつても、殆んど從來の態度をも下さず、自尊心をも傷けなかつたのである。それほ

ど、この時代のそれは、奈良朝の繼承であり、従つて多くの差異を示してゐないのである。

上述の状態の間に、業平、小町の人々は、新聲を揚げつゝあつたのである。古今集の序文に擧げられ、後に六歌仙といはれて、業平、小町を含む人々は、いづれも、新色彩、新氣分を有してゐるのである。これらで名があがつて、貫之の批評に上つたのであらう。で、これらの人々の唱導した態度に模倣者が多く、延喜に入るころには、かなり盛んになつてゐたものと見える。それらに次いで、貫之等は現はれて、またその状態を一變せしめた。貫之等の云ふところ、業平、小町の歌つたところと共通の點は大いにあるが、また差異の個處も少なからずある。内容から云へば、貫之らは觀察が細やかになつてゐる。感覺が繊銳になつてゐる。人事も戀愛には限つてゐない。しかも人事よりも、自然に多く著眼してゐる。更にそれらに通じて、談理の風が著しい。乃ち情緒的よりも理智的になつてゐる。修辭上から云へば、修飾が増加してゐる。譬喩も、懸詞も、縁語も増加した。殊に、後の二つは多數使用せられてゐる。その反對に、以上の以外の修飾乃ち序詞や枕詞等は減じてゐる。乃ち理智的傾向をあらはすに適するものが多く使はれ、それに反しないまでも、適切でないものは少なくせられたのである。

以上のやうであるから、延喜以前と、延喜時代とは頗る異なつてゐる。その極端なものに卒然として對すると、殆んど異境の、しかしあまり遠く離れてはゐないが、言語のよほど似て、然も細かな點では違つてゐる國人の作物を見るやうである。古今集中の歌は、この兩方を含んでゐる。古今集は、序に、萬葉集に入らない古い歌、また選者自分等のをも奉らしめて、編せられた本である。時には、萬葉集中のものもあるが、それは多くない。主として、延喜以前と、延喜當時との歌の集冊である故に、こゝに多くの矛盾と、齟齬とがある譯である。これを一緒にして論すること

は、なし得ない事であり、またなすべからざることである。

しかし、また考へて見ると、古今集中には、兩時代のものはあるが、延喜以前のものはあまり多くない。「讀人知らず」はかなり多くあるが、その中には、延喜以前のものばかりでなく、延喜當時のものもあると見える。また業平、小町等のは少なくはないが、これはすでに、その時代に新風調を有して、延喜當時のと通じてゐるところの多いものである。畢竟古今集序のいはゆる「千歌二十卷」の大體は、延喜當時のものであり、それでないものは、それと多くの差異のないものであり、それに反するものは、比較的小數である。これは、こゝに計數を擧げて一々云ふべきであるが、煩を厭うて略することにする。たゞ古今集（以下皆流布本を云ふ）全體一千百十一首中、「讀人知らず」は三百三十八首ある。しかし、それが必ずしも、延喜以前のものでない事を知つてゐて、戴きたいのである。

古今集の歌は、いはゆる長歌と、旋頭歌と、短歌とから成立してゐる事は云ふまでもない。その長歌は五首、旋頭歌は四首のみである。それを除くと、残るところ一千百二首が短歌である。これが古今集中の主なものである。これが延喜以前及び延喜當時の代表の短歌である。これを仔細に討究すれば、當時の狀勢は詳にし得るのである。長歌及び旋頭歌は、格調が異なつてゐるから、こゝでは省いておく。共に少數であるから、この中に混入せしめてもいい。ことに旋頭歌は、短歌にたゞ一句のみ多いのであるから、同様にあつたつても差支はないやうであるが、長歌とともに短歌と形體も違つてをり、また修飾も一つでない。且つこゝは、短歌の講座であるから、それに對しても、精確を期して、省略に従つて置くのが適當である。

以上の如くして古今集を再び檢すると、その短歌には、全然修飾のないものがあり、また反對に、修飾を有つたも

のもある。前者は三百十二首を數へ、後者は七百九十首を算する。乃ち後者は前者の二倍以上にも當つてゐる。これでも、當時の歌の修飾的であることが推測せられる。更に後者に就いて區別して見ると、懸詞は最も多くて二百四十一、譬喩はそれに次いで百四十九、枕詞は百四十三、擬人は百三十一、序詞は九十七、縁語は八十八、反覆は六十二、引喩は五十四、對照は三十三、合して九百九十八を數へる。

以上の修飾の數の比例は、前々代とも、前代、乃ち記紀とも萬葉集とも異なつてゐる。奈良朝時代以前乃ち記紀には後世の短歌の形をしてゐるものゝ中で、譬喩が最も多かつた。反覆、枕詞、序詞、對照、擬人と相次いで少なく、引喩、懸詞はことに少なく、縁語に到つては全くなかつた。であるから、この時代は、譬喩の時代ともいふべきであつた。ところが、奈良朝時代乃ち萬葉集になると、枕詞が急に増加して最高位に上り、それと連關のある序詞が盛んに用ゐられて又それに次ぎ、譬喩は減少してその次位となり、引喩、反覆、對照、懸詞といふ順序に少なくなつて來てゐる。で、懸詞が最も少數であり、而して、縁語は殆んどなかつた。乃ち、この時代は、枕詞の時代とも云ふべきであつた。それが延喜時代乃ち古今集に及ぶと、上に云つた如く、懸詞が急に加はつて最上位を占め、對照が最も少なくなり、その間に、縁語が俄かに發展して、第六位に居るに到つてゐる。前の例によれば、この時代を懸詞の時代とも云ふべく、また縁語勃興の時代とも云ふべきである。かくの如き状態はどうして出來たか。數々の原因を數へることが出來るであらうが。主な一は内容の發展を、それに伴ふ緊縮した言表の必要、二は純情よりも聰明、眞面目よりも洒脱が重んぜられたから起つたのである。

從來の歌の内容は單純であつた。むづかしい理窟は云はず、複雑した感情は述べず。たとひ長い事件を云ひ、込み

入つた事柄を歌つても、要約すれば簡單であつて、何人も直ちに理解し得る程度のものであつた。しかるに、延喜時代に入ると、比較的精緻な考察繊細な感觸が、種々の原因から起つて來た。社會的事情も單純ではなくなつた。住まふ人は、たゞ純朴一方ではそれに處せられぬやうになつた。これから發する感情、湧き起る情緒を盛るべき、形體は依然として三十一音である。その結果として生ずるものは、長くいはず、短く述べる事である。一語であつて二語の働きをもするやうに、語の取扱ひをする事である。更に、世間が面倒になればなるほど、人は智を働かせ、才を使はなければならぬ。さうでないと、生きやうはなくなつて來る。この困難な間に處するには、智と才とを、いろ／＼な方法で磨き立てねばならぬ、その磨かれて滑らかになり、或は鋭くなつたものが、困難な場合をするりと滑り通つたり、すぶりと突き抜けたりするやうになる。この結果は、賞賛をも起せば一方では笑をも持ち來す。洒脫の趣味も、こゝから生じて來る。延喜時代はまさにこの時代になつてゐるのである。その故に、懸詞が先きだつて、前の譬喩や、枕詞を、駈け抜け追ひ越して、先導に立つに到つたのである。

二

延喜時代乃ち古今集を以て代表する時代の最多數の修飾の懸詞は、どんなものであるか。懸詞の成立は、一語の音が意義を異にしてゐる他の一語と同じである時、二語のまゝで置かずして合して一語の形體を取らしめるものに始まつてゐる。この爲めに、二語が相合して、表面に現はれたところは一語であるが、裏面から見ると、二語の意がある。一語であつて二義、二義であつて一語、これが懸詞の根源である。がこれに基礎を置いて、一語の初、或は終の

部分が、意義を異にしてゐる他の一語の初、或は終、或は全體が、音を同じくしてゐる時、連結して一語の形を取ることとなつて来る。であるから、懸詞は、尙簡單に云へば、一語と一語とが、その全體または一部が同音である時、連結して一語の形を取る修飾法に外ならない。

懸詞はすでに奈良朝以前にも發見せられる。それは、枕詞成立の場合、序詞成立の場合にも、それらと本義と連結する時用をなすのであるが、それらは、枕詞、序詞に譲つてこゝで觸れない。その以外で、單獨に文の中に現はれたものが、すでに四を數へる。

大君の八重のくみがきかゝめどもなほあましみにかゝぬくみがき

の「あましみ」は「甘鮓」と「甘締」と同音であるところから懸けたものと考へられる。この類が猶あるのは云ふまでもない。

奈良朝時代に入ると、前代の制限のない形式では濟まなくなり、長歌、旋頭歌、短歌の三つの形に要約せられたのであるから。この中の短歌は、限られた形となつたから、自からものをゆつくりと長く云はれなくなり、基礎を二語兼用におく懸詞は、自づから多くなつた。枕詞成立の因、は序詞成立の因を、したものを例によつて省いてみると、萬葉集中單獨に文中に現はれたものが三十一ある。

印南野も行きすぎがてに思へれば心こひしきかこの島みゆ

の「かこ」は「加古」と「彼子」とを懸けたのであり、

妹が目をみまく堀江のさぶら波しきてこひつゝありとつげこそ

「欲り」を「堀」にかけ、「堀江」に續けたのである。

いとまあらばひろひにゆかむ住の江のきしによるとふ戀わすれ貝

「戀忘る」の「忘る」から、「忘れ貝」につづけたのである。

以上の一、二、三の歌の懸詞は、各種類を異にしてゐる。この三つは、恐らく順次に發展して行つたものであらう。これが、平安朝時代に入ると俄かに盛んになる。

古今集の中で、枕詞、序詞、各成立の因をなすものを棄てると、單獨のものゝみの懸詞は、二百四十一を數へ得る。各時代の百分比數を擧げると、奈良朝以前は一にも當らない。が、奈良朝時代は一になつてゐる。しかるに、この時は、二十四に相當してゐる。であるから、前代の二十四倍に上つたわけである。兩語、音の數を同じくし、音の列び方を同じくし、しかも異義であつて一語の形になつてゐるものから擧げると、前代にすでにあつた「松」と「待つ」と懸けたものが、ここに傳はつて、六回もあらはれてゐる。

萬代をまつにぞ君をいはひつるちとせのかげにすまむと思へば

「鶴」と「つる」もあるが、別に云ふ。以下は新しいものである。「飽」と「秋」、

忘れなむわれを恨むな時鳥人のあきにはあはむと想はず

「浦見」と「恨」、

逢ふことのなぎさにしよる波なればうらみてのみぞたちかへりける

「無き」「汀」とは次に云ふ。「みるめ」と「見る目」、

早き瀬にみるめおひせばわが袖の涙の川に植ゑましものを

これに加へて、「干る間」と「晝間」、「寄る」と「夜」、

みつしほの流れひるまをあひがたみみるめの浦によるをこそまては影しく技巧的である。

「年」と「速」、

數ふればとまらぬものをとしといひてことしはいたく老いぞしにける

「長雨」と「眺」、

おきもせずねもせで夜をあかしては春のものとてながめくらしつ

「御津」と「見つ」、

君が名もわがなもたてじ難波なるみつともいふなあひきともいはじこれに連關して「海人」と「尼」、

われを君なにはのうらにありしかば浮きめをみつのあまとなりనికి「何」と「難波」もあるが、次に云ふ。「雪」と「行」、

世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれるゆきかくれなむ「夜根」と「音」、

風ふけば波うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり

「梔子」と「口無」は、突飛さに驚かされる。

山吹の花色衣ぬしやたれとへどこたへずくちなしにして

「灰汁」と「飽」、

くれなゐにそめし心もたのまれず人をあくにはうつるてふなり

「佳吉」と「住みよし」、

すみよしと海人はつぐとも長居すな人忘草生ふといふなり

これには「人忘る」と「忘草」とがあるが後に云ふ。「摘む」と「抓む」、

春霞たなびく野邊のわかなにもなりみてしがな人やつむやと

「狩」と「假」、

野とならばうづらとなきて年はへむかりにたにやは君が來ざらむ

「聞く」と「菊」、「置く」と「起く」、

おとにのみ菊の白露よるはおきてひるはおもひにあへず消ぬべし

これには「想ひ」と「日」ともあるが、後に云ふ。「いと晴れ」と「脈はれ」とは、奇抜である。

雲もなくなぎたる朝の天空のいとはれてのみやみぬべしやは

「度」と「旅」、

このたびは幣もととりあへず手向山紅葉の錦神のまに／＼

「降る」と「古」、

今はとてわが身時雨にふりぬればことの葉さへも移ろひにけり

「ことの葉」と「葉」ともあるが、次に云ふ。

「身を盡くし」に「澤標」は巧みすぎて居る。

君こふる涙の床にみちぬればみをつくしとぞわれはなりぬる

「水脈早し」と「身を早」も、上述の類である。これからいよいよ巧緻になる。

山川のおとにのみきくもゝしきをみをはやながらみるよしもがな

「峽」と「效」、

わびしさにましらなゝきそあしびきの山のかひあるけふにやはあらぬ

「古巢」に「古す」、

うぐひすの去年のやどりのふるすとやわれには人のつれなかるらむ

「佳初」と「墨染」、

あしびきの山邊に今は墨染の衣のそでのひる時もなし

天上の「月」と時間の「月」と、

おほかたは月をもめでしこれぞこのつもれば人の老となるもの

「月」と「便宜」、「二十日」と「僅」、

逢ふことの今ははつかになりぬれば夜深からではつきなかりけり

「酸きもの」と「好きもの」

梅の花さきての後のみなればやすきものとのみ人のいふらむ

「身」と「實」と懸つてゐるのは、いふまでもなく。

物名の部は、古今集にはじめて置かれたのである。この類は機智を弄するのには至極重寶である。むづかしくて、歌に入らないやうな名詞をも、無理に懸詞で詠み込む。それで、機智の程度を示す。

「葵」と「逢ふ日」、

ひとめゆゑ後にあふひのはるけくばわがつらきにやおもひなされむ

「蕨」と「藁火」、

けぶりたちもゆともみえぬ草の葉をたれかわらびとなづけそめけむ

「月無み」と「附きなみ」、「離れ」と「枯れ」、「置き」と「沖」、「身馴る」と「水馴る」、「立つ」と「裁つ」、「逢ふ身」と「近江」、「散り」と「塵」、「ひとく」(鳥の名)と「人來」、われから(蟲の名)と「我れから」、「無し」と「梨」、「田の實」と「頼み」、「逢ふ期」と「枌」、「去ね」と「稻」とを懸けた類が、以上の外にある。この種類を第一種とすれば、このものは百三十四あつて、百分比数は五十六であるから、全懸詞數の半數以上に上つてゐるのである。この中、二回以上用ゐられたものと、一回のみ使はれたものとあるから、それらを考へると、當時の新作は八十である。これだけが當時の機智の產物である。而して、あまりに突飛で、一寸想到しえぬところまでも達してゐるのは、過ぎ

て及ばざるものである。

第一種から出で、すこし變化を見せてゐるもの、乃ち「待つ」と「松」とかけた第一種のものから延びて、「待つ」と「松蟲」とを懸けたのものは、單純ではあるが、前類よりは對者の視聽を聳てしめたに相違ない。これも奈良朝時代に、「欲り」と「堀江」、「清み」と「清みの川」の如き少しはあつたが、發展はしてゐない。それがこの時には多くなつてゐる。

「しのぶ」と「しのぶ草」、「松」と「松蟲」、

君しのぶ草にやつるゝ古里は松蟲のねぞかなしかりける

「呼ぶ」と「呼子鳥」、

をちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな

「鳴る」と「雷」

天の原ふみとよろかし鳴るかみも思ふ中をばさくるものかは

「明日」と「飛鳥川」、

昨日といふひ今日とくらしてあすか川流れて早き月日なりけり

「漏る」と「守山」、

白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

「爲」と「駿河」、

人しぬれおもひをつねにするがなるふじの山こそわがみなりけれ

「床」と「常夏」、

ちりをだにすゑじとぞおもふさきしより妹とわがぬる床夏の花

等はそれであるが、猶「憂」と「うの花」、「裳」と「藻屑」、「三日」と「薨の原」、「結ぶ」と「夕暮」、「立つ」と「立田川」、「吹く」と「吹上」、「越し」と「越路」、「惜し」と「をしどり」、「較ぶ」と「くらぶ山」、「時」と「常磐の山」等を列挙し得る。

以上の類は、大抵新作である。前代のをすこし變化せしめたのを除くと、三十三は、皆新しいものである。而して、全體は三十六、これの百分比數は十五に相當する。前種に較べると技巧的であるので、よほど少なくなつてゐる。これを第二種とすると、次の第三種があらはれる。

奈良朝時代に「君を待つ」と「君松浦山」、「千代を待つ」と「千代松の樹」があつて、一句の末が、次の、一句に音同の關係から連關してゐたが、それがこの時にも新しい語であらはされてゐる。これを第三種としてみると、

「衣借る」と「かりがね」、

夜をさむみ衣かりがねなくなべに萩の下葉もうつろひにけり

「胸はしる」と「はしり火」、

人にあはむつきのなきには思ひおきて胸はしり火に心かけをり

「おき」と「熾炭」もかゝり、「思ひ」と「火」もかゝつてゐる。

「戀忘る」と「わすれ草」、

道しらばつみにもゆかむすみよしの岸におふてふ戀忘れ草

これは「戀忘れ貝」として前代にあつたのを少し變へたのである。

「うつぶし」と「ふし染」、

世を厭ひ木のもと毎にたちよりてうつぶし染の鹿のきぬなり

これは、解釋をよくしなくてはわかり難いとおもふ。この類はすでにやゝ牽強であるから、使用の数も多くない。全體は五であつて、百分比數は二に過ぎない。却つて前代の方が多いのは、一寸變つてゐる。しかし、この時には新作が多いのに技巧が見える。

以上の三つは前代にもあつたが、この以下のものは、この時に初めて生じた技巧的なものである。

一語の長い終の部分と、他の短い一語の全體とが同音であるところから懸つてゐるのを、第四種としてみると

「竹の子」と「子」、

今更に何生ひ出らむ竹の子のうきふししげきよとはしらずや

いろ／＼の縁語があるので、懸詞も生きてゐる。

「患」と「火」、

時過ぎてかれゆく小野の淺茅には今はおもひぞたえずもえける

このものは、後に多く用ゐられてゐる。

「歎」と「木」、

なげきをばこりのみつめてあしびきの山のかひなくなりぬべらなり

「峽」と「效」との懸つてゐるのは、第一種の中である。

「おもひくらし」と「日ぐらし」、

今來むといひて別れしあしたよりおもひくらしのねをのみぞなく

「芥に」と「苦丹」、

散りぬれば後はあくたになる花をおもひしらずもまどふてふかな

「ことのは」に「葉」もあるが、これは後になつて多く用ゐられる。「思」と「日」、「いつはり」と「針」、「後藤」と「粽」、「絲を皆へし」と「女郎花」となると、甚しく技巧的で一寸理解に苦しむ。「あひ來る身」と「胡桃」と來ると、いよ／＼むづかしい。これらは、物名の一體が出來たために生じたもので、徒な遊戲である。

以上の類は、すべてが十八で、百分比數は七にあたる。技巧的になるだけいよ／＼少ない。

やゝ長い一語、または一句の初の部分が、他のやゝ短い一語と同音であるので連結したのを第五種とすると、「立ち離れ」と「橋」、

あしびきの山たちはなれゆく雲のやどり定めぬ世にこそありけれ

「沖干む」と「おき火」、

ながれいづる方だにみえぬ涙川おきひむ時や底はしられむ

等は、いづれも厭はしいほど技巧的である。「おきのゐて」と「沖のゐ」、「うつせみむ」と「空蟬」、「あはたつ」と「粟田」等を擧げると、十一もある。百分比數は五であつて少數であるが、この時新たに發生したものである。

しかし、以上のよりも猶技巧的で、しかも多く使はれたものが一種ある。それを第六種と名づけてみる。これは、やゝ長い一語、または一句の中途の一部分が、ある短い一語の全體と同音であるところから連關するものである。

ぬばたまのわが黒髪やかはるらむ鏡のかげにふれるしらゆき

「黒髪やかはるらむ」といふところと「紙屋川」と連關してゐる。

かのかたにいつからさきにわたりけむ波路はあともものこらざりけり

「いつからさきに」と「唐崎」と連なつてゐる。

さ夜ふけてなかばたけゆくひさかたの月吹きかへせ秋の山風

「なかばたけゆく」と「かはたけ」と連なつてゐる。

杜宇みねのくもにやまじりにしありとはきけとみるよしもなき

「くもにやまじりにし」と「やまし（羊蹄）」とかゝつてゐる。

「あらしのふく里」と「しのぶぐさ」、「なにかはなくさまむ」と「かはなくさ」、「一さかりこれども」に「さがりてけ」、「たのむにかたければ」と「にがたけ」、「沖からさきて」に「唐崎」、「世をばなしとや」とに「をばな」、「波のなかにはさぐられて」と「かはなくさ」等、全體は三十五で、皆新しい。百分比數は十四にもなつてゐるから、比較的當時に重用せられたのである。遊戯分子は、いよゝ盛んに入り込んで來てゐる。

以上の外に、猶種類を二二擧げ得るが、以上の中に入れていゝと思ふ。従つて大體當時の懸詞は盡きてゐる。で、それらを通覧すると、第二種としたものに最も多數を見るのは、その原始的のものであるからである。當時に於いて主として單獨に用ゐられたものであるから、原始的のものが最も多いのは云ふまでもなからう。この後にも、これは大體當時の百分比數を有しつゝ續いて行く。時によつては、それより超過するものもあること、後拾遺集の如きもあるが、これは特例と見てもいい。第一種以下のものはともに少數であるが、物名の一體が出来たので、急に出来たのである。それだけ牽強附會で、一時的興味はあつたであらうが、藝術的價値は認められない。それはそれとして、全體から部分へと、懸詞の形が移動して行くことは確實である。この風がおなじく後に續いて行く。その比較も大體に於いて同様である。なほ懸詞は、たゞ歌の中で一處のみに用ゐてそれで終つてゐるものもあるが、それに止まらず、一處にも三處にも用ゐてゐるのがあること、例示した通である。これは前代のたゞ一處であるのを推し進めたものであるから、發展として認むべきである。しかし技巧に過ぎたのはいふまでもない。更にこの懸詞は、唐突として現はれることもあるが、猶何處にか他に關係を有つてゐて、それと相應じ相聯つて、全體の統合を來し、綜合を計つてゐる。それは主として縁語である。縁語は、當時に於いてはじめて發達した修飾法である。而して、大抵懸詞と連關するに及んで、その任務を完了してゐる。數量から云へば、他にそれよりも多いものがあるが、懸詞との關係上、それに次いでこれを云はうとおもふ。

三

懸詞は、すでに上代にも、奈良朝時代にもあつた。それが發展したのが、平安朝時代である。であるから、それはただの進歩にとゞまる。ところが縁語に至つては、殆んど全然新奇の出現である。その痕跡を探がせば無いことはないが、平安朝當時のそのまゝのものは無い。

縁語は、縁故のある語を、歌の幾處にか分布したものと考へられてゐる。しか解するも悪くはあるまい。しかし、本質的の考へ方ではない。こゝに一思想がある。更にまた他に一思想がある。これに脈絡をつけて順次に解して行く。これにも種々の場合があるが、前者と後者とが、一は本義、一はその解釋で、喩義をなす場合であると、こゝに譬喩が出来る。これも隱喩の場合はやゝ異なるが、その原始的形態であるところの譬喩にあつては、正にその通である。縁語もまた同様に考ふべきものである。乃ち二思想中の主たるべきものに、副たるべきものを混合せしめ、雜揉せしめて、一を讀みつゝ他をも讀む状態に置き、前者の語と後者の語とを一緒に歌ひ、且つ味はしめる。この複雑さに趣が存するのである。且つその統一にも興味があるのである。たゞ表面にのみ立つ思想中の語に、縁故をもつ他の語が闖入したものとのみ考ふべきではあるまい。二本纏りの縄の一本々々が上下になり、左右になり、現はれ隠れしながら、猶一條を構成し上げてゐるが如く解すべきものであらう。而して、その連絡は主に懸詞によつて出来てゐる。これ、その數の少ないに拘らず、懸詞の次に述べべき所以である。

縁語は上代にはない。奈良時代にもまだない。たゞ萬葉集の中に、

梓弓ひきみゆるべみおもひみて心はすでは寄りにしものを

の、「梓弓はひけば弦が寄る」の「寄る」と、「心は君に寄る」の「寄る」と同音異義であるところから、こゝに懸詞

の關係を生じ、それで兩思想が混合せしめられる。で前に「梓弓」と置き、後に「寄る」と置いて、縁語的關係を取らしたのである。この類を強ひて云へば、三つあるが、平安朝時代のとは違つてゐる。

平安朝時代に入つて現はれた縁語、乃ち古今集中の歌にあるところの縁語の数は八十八で、百分比数は九に相當する。これは、懸詞よりも少數であるが、急激の發達であらねばならぬ。

夕ぐれは雲のはたてに物ぞおもふあまつ空なる人を戀ふとて

「夕暮は遠い人を戀ふる心が起る」といふのが主で、「雲のはたては天つ空にある」といふのが副である。それに於て、後者の「雲のはたて」と「天つ空」とが主思想中に顔を出してゐて、夕暮の愛慕の心をよく現はさしめてゐる。乃ち副思想から、主の一名詞と、他の一名詞、或は一動詞、或は形容詞が、主思想中に適度の距離で現はれてゐるのである。遠方の意の「天つ空」と、眞の「天つ空」とが懸詞になつてゐる。

咲きそめし宿しかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

始に「宿」といふ。後に「うつろふ」といふ。「うつろふ」に、「宿にかはる」と、菊の「色の變る」とが懸つてゐるで、そこに連絡が出來て、副思想の二語が主思想中に混入してゐる。

白雪のふりてつもれる山里はすむ人さへや思ひ消ゆらむ

「雪」といひ「消ゆ」といふ。こゝに副思想が二語によつて現はれてゐる。「雪の消える」と「消えて思ふ」と「消え」が懸詞になつてゐる。

梓弓春たちしより年月の射るが如くもおもほゆるかな

「春になつて日々忙しい。従つて月日のたつのが早い」と主思想に「梓弓は射る」の副思想が「光陰矢の如し」の關係から縁語が出来てゐる。

時には以上の外に、條件的語句を附することがある。それは主思想と副思想とがあまりにかけ離れて、連絡の全くない場合である。それには、「あらねども」とか、「ならなくに」とかいふ條件的意義の語句を挿入する。

わがこひは知らぬ山路にあらなくにまよふ心ぞわびしかりける

は「戀には迷ふ」、「山路には迷ふ」と「迷ふ」に兩意があるので、懸詞となり、前者が主思想、後者が副思想で混じてゐる。が、その各の主語の「戀」と「山路」とはあまりに懸離れて連絡がない。こゝに「ならなくに」の挿入の必要があるのである。

別てふことは色にもあらなくに心にしみてわびしかるらむ

「別は心にしむ」「色は身にしむ」「沁む」が一つであるが、別と色とはあまりに懸絶してゐる。この故に「ならなくに」を要して來る。

以上の類乃ち副思想が、一名詞と一動詞、(時としては一形容詞)であらはされたもの、乃ち副思想が完全に現はれてゐるものは、第一種中でも三十三の多數であつて、全體の半数以上にも上つてゐる。これを第一としてみる。

第一に次いで、第二を云はなければならぬ。第二は、副思想が、主の一名詞と、他のそれと一意を構成すべき他の一名詞とが、主思想中に現はれるものである。

住の江のまつほど久になりぬればあしたづの音になかぬ日はなし

の「松」を前に、「鶴」を後に出して、「待つ」と「松」とに懸詞の形を取らせ、それを因由として接続せしめたのである。

秋風は身を分けてしも咲かなくに人の心の空になるらむ

「風」といひ「空」といふ。眞の「空」と、夢中になる「空」と懸詞になつてゐる。

人こふる事を重荷とになひもて枅なきこそわびしかりけれ

「荷」といひ「枅」といふ。「枅」と「逢期」と懸詞の形になつてゐる。

この類は前者よりも少なく、前者が多數であつたのと反してゐる。副思想の表出が完全に行はれてゐないのがその主因であらう。

以上のは、主なる語と、それと連關する他の一語乃ち二語で、副思想が主思想中に現はされてゐるものであつたが、これが技巧的に進むと、主な一名詞と、それと關係のある他の一動詞、一形容詞、又は一名詞の中の二つによつて、副思想が現はされるものが出て来る。乃ち三語のものが出て来るのである。これを第二種としてみる。

今朝はしも置きけむ方も知らざりつおもひいづるぞきえて悲しき

「霜」が主で、「置く」、「消ゆ」が続く。「霜」は「しも」と懸詞になつてゐるのは云ふまでもない。

秋霧のともにたちいでてわかれなば晴れぬおもひにこひやわたらむ

「秋霧」が主で、「立つ」「晴る」が続く。「晴る」は「心が晴る」と「霧が晴る」とで懸詞となつてゐる。

憂きことをおもひつらねてかりがねのなきこそわたれ秋のよなく

「かりがね」が主、「つらぬ」「なきわたる」が續く。「泣く」と「啼く」とが懸つてゐる。これらの類が第二種中には多い。以下は皆少ない。

おもへども人目づゝみの高ければかたと見ながらえこそわたらね

は「堤」「川」「渡る」と連なつてゐる。乃ち二名詞一動詞で副思想が現はされてゐる。「彼は」と「川」と懸つてゐる。

枯れはてむ後をばしらで夏草のふかくも人のおもほゆるかな

「夏草」「枯る」「深し」とで副思想を現はしてゐる。「枯る」と「離る」とかゝつてゐる。一名詞一動詞一形容詞と續いてゐる。

以上のやうなものは少數であるが、すべて第二種は、副思想が三語で現はれてゐる。これが二十六、百分比數は三十に相當してゐて、少ないが後になると、却つて多くなつてゐる。詞花集の如きは、最も多くて百分比數四十九にまでも達してゐる。漸次技巧的になつた事が證明せられる。

以上のに次いで、別思想が一名詞と他の一動詞、一形容詞、或は一名詞の中の三語で、合して四語で主思想中に現はれるものがある。これを第三種として見る。

したにのみ戀ふればくるし玉の緒のたえて亂れむ人なとがめそ

「玉の緒」が主、「絶ゆ」「亂る」「くるし」と續く。「苦し」と「繰る」と又「玉の亂る」と「心の亂る」とがかゝつてゐる。

青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花の綻びにける

「糸」「よる」「亂る」「綻ぶ」と連なつてゐる。衣の「綻び」と花の「綻び」とかゝつてゐる。

水の泡の消えてうき身といひながら流れてなほもたのまるゝかな

「泡」「消ゆ」「浮く」「流る」と續いてゐる。「うき」と「憂身」、「流る」と「ながらへる」の意と懸つてゐる。

逢ふことのなきさにしよる波なればうらみてのみぞたちかへりける

「波」「汀」「たつ」と、「汀」と、「無き」と、「うらみ」と「浦見」と懸詞になつてゐる。それでこの修飾は出來てゐる。

これらは皆煩雜に過ぎてゐるが、かやうに出來てゐて十一を數へる。これがかやうに少數であるのに、猶これよりも少數で、技巧的なものがある。それは、副思想が主なる一名詞に續いて、他の一名詞、一動詞、一形容詞の中のいづれかの四語が、主思想中に混じてゐるものである。乃ち五語で、副思想があらはれてゐるのがそれである。その上にそれは折句にもなつてゐる。

から衣きつゝなれにしつましあればはるゝきぬるたびをしぞおもふ

は「唐衣」、「著る」、「馴る」、「棲」、「張る」と連關してゐる。この技倆の巧みさを見よ。しかも、それに伴なふ煩雜さを見よ。この煩雜味は猶後には襲ふものがあつて、

霞さへたなびく野邊の松なれば空にぞ君の千代は知らるゝ

もちながら千代もめぐらむさかづきの清きひかりはさしもうけなむ

等が現はれてゐる。

以上のやうに、懸詞に連關をもつて、關係のある語を主思想中に混入して、副思想を完全に近く現はして、錯雜の妙、綜合の巧みを見せて居るのは、當時の詞人の技倆と云はねばならぬ。物を智的にいふ。これによつて才藻を競ふ。勝ち得たものが當座のみにせよ、無上の名譽を荷ふのは、才子淑女の理想としたところであらねばならぬ。今日の如く、たゞ無用の技巧としてののみ排斥することは、當時の思ひもかけないところであつたのである。たゞ今日に在つても、第一種の如き簡單な副思想を挿入して、一種のうるさからざる複雑な美を構成して、感情を障礙なく表はしめることは、あながち排除すべきことではあるまいと思ふ。

四

縁語に道寄りをしたので、懸詞に次いで多數である譬喩に急ぐべきを後れた。

譬喩は、上代にすでに少なく用ゐられてゐる。しかも、すでに隱喩の形が多く、直喩が少なくなつてゐる。これは短歌の形體を取つてゐるものゝみに就いて云ふのであるが、その兩者の數は四十七、百分比數は三十七である。しかしてその四十六は隱喩の形式を取つてゐる。上代は譬喩の時代とも云へる。

奈良朝時代には、萬葉集に於いて、譬喩は上代よりも減少してゐる。短歌の形體のものゝみで見ると、全數は三〇八、百分比數は十三であるから、大いに少ないのは云ふまでもない。しかし、内容的には進歩して、今日もなほ興趣の多いのは、多くこの時のものである。天を海、月を舟に比して、

天の海に月の舟浮け桂楫かけて漕ぐみゆ月人をとこ

雪を梅に比して、

わがやどの冬木の上に降る雪を梅の花かとうち見つるかも

等擧げ来れば甚だ多い。しかして、隱喩的のものは多く、二百三十もあり、直喩的のものは少なく、たゞ七十八に止まつてゐる状態は、上代と同じやうである。

平安朝時代に入つて、古今集によると、この時代は兩時代を通過した後であり、且外來文化の影響を多分に受けてゐるところから、また國民自身も覺醒して來た關係から、洗練せられ、鑄冶せられたものが澤山出て來た。この洗練せられ鑄冶せられたところが、當時の見どころである。これらをまづ材料から見ることとする。

古今集の歌に用ゐられた譬喩には、植物が資料になつたのが最も多い。その中、木の花（主に櫻）がまた多い。その花を喩義、雪を本義としたもの、

冬ながらそらより花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ

冬ごもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞ降りける

梅を喩義、雪を本義としたのは、萬葉集にあつたが、その反對に出たのは、この時代からである。

雪ふれば冬ごもりせる木も草も春にしられぬ花ぞさきける

「春にしられぬ」の一句に、才も見えるが、嫌味も見える。

雪を喩義、梅を本義としたものもある。

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人の知るべくはそれである。が、それに香を加へて、

梅が香の降りおける雪にまがひせば誰がことゝわきてをらましと云つたのは、この時代人の巧慧さである。

花を喩義とし、女を本義としたものが、次に多い。

とゞむべきものとはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か

この花は、花摘をして居た女である。花に散り易いあだものであるから、

あだなりと名にこそたてれ櫻花年に稀れる人も待ちけり

と云ふ事も起る。自分はあだする花ではないと斷言する。以上のものよりも、以下のは少ない。花を喩義、波を本義としたのは、萬葉集にもすでにあつた。「白木綿花に波たちわたる」の類がそれである。これがこの時にも続く。

谷風にとくる氷のひま毎にうちいづる波や春のはつ花

花を喩義、心を本義として、

いろみえでうつるふものは世の中の人の心の花にぞありける

同じく花を喩義、出世を本義として

日の光やぶしわかねば石の上ふりにし里に花もさきけり

は妙であらう。花に次いで草がある。その老いたのを喩義、老いた人を本義として、

大荒木の森の下草老いぬれば駒もすゝめず刈る人もなし
は率直さが面白いと思ふ。

草を喻義、戀を本義として、

わが戀はみ山がくれの草なれや繁さまされど知る人のなき
は、喻義宜しきを得てゐる。

草の中で「忘草」が比較的多く用ゐられてゐる。萬葉集にも、この草は屢々ゐらはされてゐるが、喻義に用ゐたのはここからである。

忘草枯れもやするとつれもなき人の心に霜はおかなむ

は、その中で技巧的に進んだものであるが、それだけ厭味がある。

浮草は比較的多い。これを喻義、身を本義として、

わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞおもふ

は絶唱といはれてゐるが、著しく巧智である。菊と君、藻と思、薄と袂、撫子と子と、前者を喻義、後者を本義としたものもあるが、撫子のは、懸詞にも關係をもつ。

あなこひし今も見てしが山がつの垣ほにさける大和なでしこ
些か他と異なつてゐる。

木に關しては少ない。朽木を喻義、老身を本義にして、

形こそみ山がくれの朽木なれ心は花になさになりなむ

は珍らしいであらう。資料を植物に取つたものは四十二を數へるが、大體前述の通である。色、形、匂から心を牽くところから花が多く、他は少ないのは自然である。しかして、その盛の方面よりも、衰への方面を取ることが多くなつてゐて、悲哀の快感を喜ぶ傾向は、此處でも見られる。

地に關したものは、前者に繼ぐ。その中、川が一番多い。それを喩義、涙を本義として

なみだ川枕ながるゝうきねには夢もさだかにみえずぞありける

誇張の極點であるが、當時の情趣は、それに適したと見える。

たゞ水といふのが、それに續く。人を本義としてゐる。

よしの川雲の心ははやくとも瀧の音にはたてじとぞおもふ

水脈を喩義、雲を本義として、

天の川雲の水脈にてはやければ光とゞめず月ぞ流るゝ

は、精彩がある。

水の泡は、はかないものであるから、それを喩義、落花を本義とした。

枝よりもあだに散りにし花あれば落ちて水の泡とこそなれ

は、聯想が當を得てゐる。

瀧は、音から喩義となり、名の立つと、涙と、聲とが本義となつて、

おろかなる涙ぞ袖に玉はなすわれはせきあへず瀧つせなれば
等がある。

波、淵、堤は漸次少ない。波を喻義、花を本義とするは、こゝから始まる。

さくら花ちりぬる今のなごりには水なき空に波ぞたちける

前代に波を本義、花を喻義としたのを、逆に取つたのは始めてである。波を喻義、鶴を本義にしたのも始めてである。
淵の喻義は、心の本義と連なる。

そこひなき淵やはさわぐ山川の浅き瀧にこそあだ波はたて

淵の反對の瀧は、喻義として、浅い心の本義に對した。それは、前の歌にある通である。

堤、野、山、及び塵を喻義としたものは、いよゝ少ない。その中で、

風のうへにありか定めぬ腰の身はゆくへもしらずなりぬべらなり

は、佛典から來たのであらうが、作者の生活状態さへ思ひやられて哀れである。すべて地に關するものは二十八を數
へる。

天に關するものは、地と大抵同様である。その中で、雪を喻義とし、花を本義としたものが最も多い。

駒なめていざ見にゆかむ故郷は雪とのみこそ花はちるらめ

の類であるが、當時は新しい譬喩として光があつたに相違ない。

雪を喻義、白髪を本義として、

春の日のひかりにあたる我なれどからしの雪となるぞわびしき

は、今では平凡であるが、この述作の場合が、咄嗟の場合であるので、巧慧を稱へられたのであらう。

雪を喻義、思を本義として、

君がおもひ雪とつもらばたのまれず春より後はあらじと想へば

と云つたのは、確かに敵の慮を巧みに衝いたものと思ふ。

月は前者に次ぐ。これを喻義、雪を本義として、

あさぼらげ有明の月とみるまでによしの、里に降れる白雪

は、微雪で、しか見えたのであらう。

月をその光から、君恩の本義に對したのは、妥當である。

ひさかたの中に生ひたる里なれば光をのみぞたのむべらなる

月を正しい人に比して、

おほぞらを照りゆく月し消ければ雲かくせども光消なくに

は強い云ひ方である。月の光が何處にもさすので、それを喻義に何處にも出入する人を本義に取つたのは、

かつ見れどくともあるかな月かげのいたらぬ里もあらじと想へば

であるが、巧みである。

雲を喻義、花を本義としたのは、

櫻花さきにけらしなあしびきの山のかひよりみゆる白雲

當時にあつては、新彩のあるものである。同じく雲を喻義とし、瀧を本義としたのも面白い。しかも、袂を本義としたのは、突飛であらう。

墨染の君が袂は雲なれやたえず涙の雨とのみ降る

は今日想像だにせられない。涙の雨から作り上げたものである。更にそれに、男の遠ざかるのを比したのに對して、男が、

ゆきかへり空にのみして經ることはわがある山の風はやみなり

と雲を自分の喻義に取つたのは巧緻であらうが、斧鑿の痕をみる。

露を喻義、命、涙を本義としたのは想到し易い。

秋ならでおく白露にねざめするわが手枕のしづくなりけり

は、今では陳腐である。

風を喻義、媒を本義としたのに、

しら波のあとなきかたにゆく舟も風ぞたよりのしるべなりける

があるが、これには適合の妙をみる。

風に對して戀人を本義とした、

宮城野の本あらの小萩露をおもみ風をまつごと君をこそまて

は、可憐である。

日に對して天恩、または君を本義としたのは、「高光る日の君」などすであつた。しかし、

峯高き春日の山に出づる月はくもる時なくてらすべらなり

は、森嚴の語、及び調である。

雨を喻義とし、涙、落葉又は紅葉を本義としたのは、感趣中心主義の時には當然出づべきものであるが、

なく涙雨と降らなむわたり川水まさりなばかへりくるがに

は、誇張に過ぎて、すでに眞味はない。

以下のものは少數であるが露に名の立つを、烟に戀人を、星に菊を比したのは、いづれも奇抜であるから、隨伴者が隨つて少ない。

須磨のあまの鹽焼烟風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

は面白いではないか。すべて天に關するものは、二十九を數へる。

器具服飾に關するものは、前者よりも少ない。錦を喻義、紅葉を本義としたのは古くからある。これを巧みに、

見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり

は古事によつて、「夜の錦」とのみ云つたのに、一步を進めてゐる。技巧的にたしかに優秀である。

錦を喻義、柳櫻を、本義としたのは、新しかつたに相違ない。

みわたせば柳さくらをこきまぜて都ぞ春の錦なりける

は有名なものである。その有名の原因は、新しい譬喩にあつたのである。

玉を喩義としたものは、その數前者に次ぐ。露の玉などといふのは、當時にはまだ古くない。

秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるくもの糸すぢ

などいふに技巧がある。

浅みどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

も、同じく技巧的なのに興味がある。

玉を喩義、瀧の水玉を本義としたのは、珍らしいであらう。

ぬきみだる人こそあるらし白玉の間なくも散るか袖の狭きに

の類は、それである。

玉に涙を比すとは、當時では、妥當であつたであらう。

白玉とみえし涙も年ふれば唐紅にうつろひにけり

つゝめども袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの涙なりけり

これは後になるに従つて、いよく多い。

舟を喩義、雁を本義としたは、牽強である。

秋風に聲をほにあげてくる舟はあまのとわたる雁にぞありける

「聲をほにあげて」といふのから、「舟」に想到したのであらうが、これは牽強である。が、木の葉に比したのは、穩當

であらう。

白波に秋の木の葉のうかべるをあまの流せる舟かとぞみる

流せるは、流し失つた舟の意である。この白波は廣い池などのでなくてはならない。

衣を喩義、戀人を本義としたものもあるが、却つて霞を比したのが有名になつてゐる。

春の著る霞の衣きぬをうすみ山風にこそみだるべらなれ

譬喩は面白いが、牽強に陥つてゐる。

布を喩義、瀧を本義としたのは、「瀑布」といふ語の翻譯かとも謂はれる。

主なくてさらせる布を七夕にわが心とや今日はかさまし

たがためにひきてさらせる布なれや世をへて見れどとる人もなき

主語の瀧が省かれてゐるので、意義やゝ不明であるが、題によつて理解せられる。

以上と變つて、絲を喩義、瀬を本義としたのは、

清瀧のせゝのしらいとくりしめて山分衣織りて著ましを

であるが、技巧に過ぎて實感に遠い。

器具服飾に關するものは、大體前の如くである。三十を數へて多い方である。動物に關するものはそれよりも少な

く。

杜宇を喩義、男を本義として

たが里に夜がれをしてか杜宇たゞこゝにしもねたる聲する
は面白いが「寐る」で本義があらはれて、全體の喩義なるべきを破つてゐる。

千鳥の跡の文字に似てゐるところから、

忘れなむ時しのべとぞたま千鳥ゆくへもしらぬあとをととむる
は哀深い。

啼くといふことが、人の啼くといふこととおなじやうな意味を感じた時代であるので、戀に泣く關係から、雉子から、
春の野のしげき草葉の妻戀にとびたつ雉子のほろゝとぞなく

雁から、

植ゑていにし秋田かるまでみえこねば今朝初雁のねにぞなきぬる

鶉から、

野とならば鶉となきて年はへむかりにだにやは君がこざらむ

鶴から、これは榮達しない歎きの泣聲から、

あしたづのひとり後れてなくこゑは雲の上まできこえつがなむ
蟋蟀も、蟬も、おなじく戀の啼き聲を取る。

きりくすいたくななきそ秋の夜のながき思はわれぞまされる
明けたてば蟬のをりはへなきくらし夜に螢のもえこそわたれ

螢は燃えるに關してゐる。かうして、動物は、少なく十一のみを數へる。

人を喩義としたものは、海人がまづ多い。

うきめのみ生ひてながるゝ浦なればかりにのみこそ海人はよるらめ

本義は男である。みるめを刈りによると云つたのである。

人に添ふ影を喩義として、

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君がかげとなりనికి

遠近を上手に述べてゐる。眞情も見える。巧みといふべきであらう。

疑問的には述べてあるが、夢を喩義、世中を本義としたものは、

世の中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらずありてなければ

反覆の巧みさも見え、厭世の意も十分にあらはれてゐる。

涙の喩義は多さうで少ない。

春雨の降るは涙かさくら花ちるををしまぬ人しなれば

以後になると多くなる。すべて、人に關したものは、たゞ八のみで、すでに多くない。

古今集の譬喩を材料から見ると、大體以上の通である。これらを通觀すると、ことに目に附くのは、それらの繊細であることであり、また佳麗であることである。動物でも、植物でも、大きなもの、粗いものは使はず、小さなもの、細かなもの、美しいものを用ゐてゐる。花とか、錦とか前代に美しいとしたものは、いろ／＼用ゐられて、譬喩の中心の

形をしてゐる。

また當時は、材料をよく選擇して用ゐることをしてゐる。眼前にあるから、匆卒に用ゐるといふことは、前代にもすでにしなかつたであらうが、猶この時代に比べれば、その度に於いて少ないやうである。この時は、類似點を十分に認めて、場處の近いものと、遠いものと區別はせず、精密に考へて、適當なものを用ゐることをしてゐる。

また次に、前出の語の連想によつて、譬喩の主材を考へ、または主材に連關して、副主材といふべきものを作り出し、或はその屬性によつて、材料を活躍せしめるやうにする。「ひさかたの雲の上にて見る菊はあまつ星をぞあやまたれける」の星は菊を指したのであるが、その根據は「雲の上」にある。「雲の上」から「星」に想到し、而してそれを菊の譬喩に用ゐたのである。「しら波のあとなき方にゆく舟も風ぞたよりのしるべなりける」は、舟を自分に、人を慕ふ意を海上を行く舟に比したのであるが、それから風を點出して、それを媒に比したのである。主材が舟、副主材が風となつてゐるのである。「空蟬の世にも似たるか櫻花さくと見しまにかつ散りにけり」は、櫻花に世を擬したのであるが、櫻花が早く散ると、世が早く移ると、よく適合してゐるところから、櫻の屬性がよく活躍してゐる。かやうに、熟慮深思ともいふべき結果から、譬喩が生じてゐるのは、前代には乏しかつたところである。

次にまた、當時には、譬喩は意義から作られるのが正當であるが、たゞ名前乃ち音から出来てゐるのが比較的多くなつてゐる。「明日」と「飛鳥」と同音であるところから、「昨日」といひ今日とくらして飛鳥川流れて早き月日なりけり」も出て來てゐる。たゞ、川の流と年月と、早さが似てゐるといへばいゝのであるのに、飛鳥川と云つたのは、明日と同音の関係があるからである。「人を見るめ」と海草の「みるめ」と、「子」と「撫子」との如きも、同じ行方である。

乃ち懸詞の關係から、譬喩が出来てゐるのである。これは、この時代に於いて多くなつて、次々に及ぶものである。

次になほ、當時の譬喩の成立に、誇張の分子の多くなつてゐる事は見逃せない。誇張は前々代からある。小事を大事らしくいふ。微物を長物らしく述べる。これはその當時の人々の心には、しか思はれたのであらう。決して、故意にさう云つたのではあるまい。今日からはしか見え、しか感ぜられるのである。が、この頃には、對者に注意を喚起する爲めに、やゝ意識的に小を偉に微を大にしたのであると思ふ。「涙の川」、「涙の瀧」、「花の波」、思ひにもえるを富士の山、涙の波たつ袖を清見關に比べるに到つては、あまりの誇張と云はなければなるまい。これによつて、當時はたしかに豫想した効果を擧げ得たのであらう。が、後に到るに従ひ、慣習的になり、かう云はなければ歌の常識のない人のやうにさへなつたのである。當時の譬喩は、誇張に過ぎて眞率を缺いてゐる。

以上の諸種の譬喩を、どういふ形で、當時は現はしてゐるかが、次の問題である。直喩と隱喩は、その重なり形であるから、まづこの二つに區別して見る必要がある。これにも、截然と分けて、兩種のいづれかに隸屬せしめられるものもあるが、介在して、いづれにも附け得ないのが少なからずある。まづ、十分に隱喩として認め得べきものを取つて見ると、

そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそあだ波は立て

奥山の岩がき紅葉ちりぬべし照る日のひかり見る時なくて

前者は、戀する人の心の深さ淺さを述べ、後に宮仕しないで山にこもる人を比したのである。ともに表面の意義は十分に現はれ、そのみで既に完成した歌であるが、實は喩義であつて、その背後に前に述べた本義はすっかり隠されて

ゐる。これが眞の隱喩で、譬喩としては最も巧妙に出来てゐる。そのものが古今集には五十だけある。百分比數は三十四に相當する。前代に百分比數が六十六であつたのに對して、著しく減少してゐる。これは、後に云ふ助辭の發達が、その因をなしてゐる。以上の類を第一種として見る。

隱喩の中で、本義が喩義に續いて現はれ、それが「の」の助辭で結びついて、一語となつてゐるのが第二種に續く。「紅葉の錦」「涙の川」「心の花」「波の花」「塵の身」「身の白玉」「霞の衣」「雲の水脈等」、いづれもそれである。この中「の」を省いて一熟語形となつたものに、「人目堤」「涙川」もある。この涙川は、五度までも古今集中に現はれてゐるから、よほど興趣を感じたのと見える。この數は二十七、百分比數は十八である。これは前代の二倍にも増加してゐる。これを第二種として置く。

一首の歌の中に、本義と喩義とが共に表面に現はれながら、その間に何等の關係となるべき語句もないが、實は離るべからざる連絡があるのがある。これは喩義と本義とが、すでに一般に知られて、一々關係語を置かずとも解しえられるまでに到つた程度に於いて、はじめて成るものである。乃ち、「紅葉」と「錦」、「雪」と「花」との關係は、すでに知悉せられたものであるから、

龍田川紅葉みだれて流るめり渡らば錦中や絶えなむ

霞たち木の芽もはるの雪ふれば花なき里も花ぞ散りける

このものは、すでに少ない。たゞ八で、百分比數は五にとゞまつてゐる。これを第三種として見る。

本義と喩義とが「なりけり」又は「ありけり」といふ説明語を取るものは、すでに一般に近く承認せられたものか

ら起るのであるが、それを些か進めて、冒險的に道破すると、異なつた趣が生じる。

秋風に聲をほにあげて来る舟は天のとわたる雁にぞありける

風吹けどところも去らぬ白雲は世をへて落つる水にぞありける

いづれも、「ありけり」を取つて従來の範圍を脱してゐる。しかし、上述の助辭を取るものを第四種として見ると、そのものは少なくて十五を數へる。

眞の隱喩及びそれに近似したものは、以上の通である。が前代よりも減少して百で、百分比數は六十七にあたる。譬喩の普遍的になつたものから隱喩が出来るのは云ふまでもないが、これが進んで、従來の範疇以外に脱して來ると、おのづから説明語の必要が起る。前代よりも奇抜な新奇な喩義が考へられるやうになつた當時に於いては、この類の減少にあるべきである。

直喩は上代から多かつた。その中で、多かつた「ごと」で本義を喩義とを繋ぐものが、まづ目に入る。これに「の」の加はつて「のごと」となつたのもこれに入れると、

花のごと世のつねならば過してし昔はまたもかへり來なまし

もある。この類は多くなくて、ただ三あるのみである。が第一種としてみる。

本義喩義の連接に、「と」の助辭を使つて、「と見ゆ」、「と見る」、「と散る」等の動詞、時には形容詞と續けた類がある。

こゝろざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花とみゆらむ

あしたづの立てる川邊を吹く風によせてかへらぬ波かとぞみる

等舉げれば、このものは前種に反して多くて、二十二もある。これを第二種として置く。

本義喩義の連續に、助辭の「に」を以てして、「にす」「に思ふ」等と、動詞、時には形容詞に續けるもの、

いくよしもあらじわがみをなぞもかくあまの刈藻におもひみだるゝ

の類があるが、前種と大體同様の意味であるから、同じほどであつて、やゝ少なく、乃ち八を數へる。第三種として置く。

「こゝち」といふ語で、本義喩義を連接するものは、前代にはない。後には多いのであるが、この時には甚だ少なくて一のみある。これも第四種としておく。

「か」の疑問の辭を、本義喩義の連接に用ゐたものがある。

春雨のふるは涙か櫻花散るを惜しまぬ人しなければ

の類は、前代にもあつたが、この時の方が多い、と云つても、たゞ四のみである。これを第五種と見る。

同じ疑問の「なれや」を用ゐたものに、

秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくる蜘蛛の糸すぢ

「なれや」は感嘆の意の場合もあるが、前の喩義が難解である心配があるから、特に疑問として餘裕を残した形であるので、一種のゆかしさと、聲調の曲折とを感じさせる。このものは前代よりも多くなつてゐて、十を數へる。第六種として置く。

本義と喩義との關係を、疑問的にして、前に「や」、後に「らむ」とあるべきが、却つて「や」のみがあつて、「らむ」のないのが出て來た。乃ち、

谷風にとくる氷のひまごとにうち出づる波や春のはつ花

はそれであるが、極めて放膽的な言表である。これを第七種として置く。

直喩及びそれに近似するものは、上述のやうであるが、その中第一、二、三、四の四種は、斷定的口氣を持つてゐるに反し、第五、六、七の三種は、疑問的口氣をもつてゐる。乃ち、初の種類は、喩義本義の關係が、一般的に殆んど知られてゐてしかも説明を要する程度のものであるが、その以外のものは、一考を要するところから、疑問の形態にして、却つて興趣のあるものである。そしてそこに一種のゆかしみ、なつかしみ、親しみがあるので、第四、第七の如きが、新たに出來、第六種が増加したのと見える。かやうにして、直喩及び直喩的のものゝ總數は四十九で、百分比數は三十三に相當する。前代の百分比數が二十五であつたのに對して増加してゐるのは、上述の意味である。で、これらが、この後になつてどうなるかと、千載集に到るまでを見ると、隱喩的のものは、大體に増加し、直喩的のものは、大凡減少してゐる。百分比數で云へば、隱喩的のものゝ最も多いのは、詞花集七十九で、最も少ないのは、拾遺集の六十三である。それと反して、直喩的のものが最も少ないのは、詞花集の二十一で、最も多いのは拾遺集の三七であるのは、前の關係上云ふまでもない。大體に於いて、新しい譬喩を作らうといふ意氣の盛な時は、直喩的のものが多くなり、從來の範疇を脱しないで、穩健な態度を取る時は、隱喩的のものが多くなつてゐる。

五

古今集中の、懸詞、縁語、譬喩に就いて、あまりに語り過ぎた。急いで、その以外の修飾に關して述べねばならぬ。枕詞は計算の仕方について頗る異なるが、上代の記紀に於ける短歌の形を取つたものに就いて見ると二十六で、百分比數は二十一にあたる。奈良朝時代に入つて、萬葉集によると、九百六十三、百分比數四十に及ぶ。しかも、當時これよりも多い修飾數はないのであるから、當時を枕詞の時代とも云ふべきであらう。平安朝になつて、古今集には、枕詞は百四十三を數へる。しかし、百分比數は十四であるから、前代に比べて、非常に減少したのである。

枕詞は、その最初の、記紀に於いて短歌形體のもので、尤も多いのは、「朝霜のみけ」、「三日潮播磨」の如き、同異義乃ち懸詞の關係で、本義と結びつく枕詞であるが、これが萬葉になつても、依然として多數である。この音を因由とする意義の變轉が、よほど興味を喚んだものと見えて、古今集になつても、やはり多數である。

古今集になつて、枕詞の減少したのは、首中に意義の充實を重んずるがために、それと關係はありながら、たゞ一部分にのみ止まる如き修飾は、なるべく排除する方針を取つたためであらう。乃ち時代とともに、各人の懷抱する思想も、感情も、複雑になるとともに、それを十分に表現するのには、限ある三十一音中に關係の淺いものゝ闖入は、拒否せねばならぬ。ことに、漸次根本的の意義を失つて、たゞ接頭語的の用をのみなし來つたものは、使用を遠慮せねばならぬ。これは後にいふ序詞と連關する。序詞は、枕詞と殆んど同じ意義を持つ。たゞ五音一句に止まらず、長大なものであるから、これの減少は自然であるが、この趨勢は、引いて枕詞にも及んだのである。

古今集には、前代にあつた「如し」の意のある「なす」の語が、消滅したのであるから、これを因由とした類がなくなり、また「じもの」といふものも同様になつたから、眞の譬喩の意を表現した種類は亡びたのである。しかも、以上の意味をなすものは、大體懸詞から成つた種類に入つてしまつたから、その類は増加してゐる。

古今集中の枕詞で第一種の懸詞から來るもの、乃ち「梓弓」を「はる」に、「玉篋」を「二見」に續ける類のものが、すでに述べた通に最多數であつて、百分比數のみで云へば、六十八に當る。第二種の性質狀態から來るもの、乃ち「たらちね」から「母」、「うちわたす」から「遠方」と續けるものは第一種に次いで多い。第三種の材料から來るもの、「敷栲」から「枕」と續けるものは少なく、第四種の反覆から來るもの、乃ち「白川の」から「しらす」、「よしの川」から「よしや」とつゞけるものはやゝ多く、第五種の地理から來るもの、乃ち「近江のや」から「鏡の山」、「大原や」から「をしほの山」と續ける類はすくなく、第六種の生産から來るもの「まがねふく」から「吉備」と續ける類もともに少なく、第七種の附屬物から來るもの、乃ち「かみがきの」から「みむろ」に續ける類もまた少ない。すでに云つた如く、譬喩から來るもの、別に又數量から來るものは缺けてゐるが、大體前代に多かつたものは、この時にも多い。前代の趨勢は改まつてはゐない。

位置から見ると、第一句を占めるものが多いので、八十二、百分比數は五十七に當る。第三句を占めるものがこれに次ぐ。枕詞は句の始めにあるのが當然であるから、第二句で文が終結した場合には、第三句の始に現はれるのがまた當然であるから、文の中途にあらはれるものは、變態といふべきであるが、すでに少なくない。従つてまた第四句に現はれるものも出て來た。

植ゑていにし秋田刈るまでみえてねば今朝はつかりのねにぞおきぬる

は「今朝はつかりの」を序詞と認める事も出来るが、それよりも、「はつかりの」ばかりを枕詞と認めて、第四句の中途にあるものとした方が正しいであらう。また、第五句に現はれるものも出て來た。

朝 単独に見るべきみとしたのまねばおもひ立ちぬる草枕なり

は「草枕」が最後の句にあらはれてゐる。これらは異形式であるが、「百敷」を「大宮」の意に用ゐる類もあるから、枕詞の意義の轉化として見るべきである。それよりも、前代と當時と、枕詞の意義を異にしたのは、枕詞をして接頭語に終らしめず、本義と必然的關係ある如く作爲し、一枕詞に限り、他のものを以てしては、全然意義を失ふが如く接合することをして來た事である。

なよ竹のよながき上にはつしものおきぬてものをおもふころかな

の「なよ竹」は、「よ」にかゝるのみでなく、「初霜の」は「起きぬる」に連なるのみでなく、寒夜竹上に霜の起きぬるころを寐ねずしてゐるの意を利かせてゐる。この類は、前代にあつても極めて少なく此の時になつて二十五となり、百分比數十七にも及んでゐる。これとおなじく、枕詞も舊來のまゝのを用ゐるが、受辭の變化を來して、人の意表に出でようともしてゐる。乃ち「ちはやぶる神」と續いたのを、「加茂」「とし」、「白露の」の「消ゆ」を「起く」とした類も三十七、百分比數二十六もある。更にまた全然新しいものもあつて、「高砂の屋上」、「白川のしらす」、「夕月夜をぐらの山」等が二十二もあり、百分比數も十五を數へる。これは、古代の殆んど新作であつたのに比して、少ないことは少ないが、その趨勢がこゝに及んだのである。

枕詞とおなじ成立の條件を有しながら、それよりも長大な形を有する序詞を、こゝに附説するが適當であらう。この類は、古今集では九十七、百分比數は十にあたる。これは記紀時代のと比數は同數であるが、前代の萬葉集中の六百六、百分比數二十六に對すると甚しい減少である。この減少率は枕詞よりも猶多いのである。それは、本義の充實を欲するところから、なるべく本義に關係の少ないものを排除する方針を取つたのであるが、それには、たゞ大體五音の一句を占める枕詞を用ゐないよりも、それよりも長大な序詞を使はない方が適合してゐたからである。

序詞の成立には三種ある。その一は、懸詞から本義に連なるもの、これを第一種として見る。その二は、反覆から本義に連なるもの、これを第二種として置く。その次は、譬喩から本義に連なるもの、これを第三種として定める。しかし、枕詞に云つた如く、この第三種は、古今集では、これを缺いて居る。それは譬喩を直接にあらはす「なす」の語がなくなつたからである。たとへば、前代には、「千鳥なくみよしの川の川音なすやむ時なしに思ほゆる君」と云つて「なす」を用ゐるのであるが、當時は「よしの川岩波たかくゆく水の音には立てじこひはしぬとも」の如く「なす」は用ゐなくなつて、たゞ「の」を使ひ、それが「水の音」と聲の意の「音」と、懸詞の形體で本義と連接してゐる。で、おのづから第三種はなくなつてゐるのである。

かやうに、古今集の枕詞はたゞ二種あるのみであるが、第一種は六十八、百分比數七十を數へる。前代よりも少しく減じてはゐるが、猶多數である。第二種は二十九、百分比數は三十である。これは、前代よりも増加してゐる。懸詞全盛の時代のこゝでは、かくあるのは、やゝ矛盾の現象であるが、更に上ると、反覆よりするものは多く「讀人しらず」の歌で、延喜よりも以前のものである。であるから、延喜當時とは少しく意味を異にしてゐることをみねばな

らぬ。

以上の枕詞は、どんな長さを持つてゐるかを見ると、五七五の三句を占めてゐるものを第一種とすると、これが多くて、六十一もある、百分比数は六十三にあたる。これは前代の五十一よりも多い。五七の二句を占めるものを第二種とすると、三十四で、百分比数は三十六。これは前代の四十七よりも少ない。その以外に、五七の二句では足らず、五七五の三句としてはやゝ多いもの、

春日野の雪間を分けて生ひ出づる草のはつかに見えし君はも

がある。が、これは一つで、はじめて現はれてゐる。猶前代には、この外は五七五七の四句をも占めるものがあつた。乃ち「我妹子が赤裳ひづちてうゑし田を刈りてをさめむ藏無の濱」がそれであるが、これは、この時にはなくなつてゐる。長いものを排除したのであるから、これは當然であるが、三句のものが多くあり、二句のものが少なくなつてゐるのは、それと矛盾してゐて、不思議である。が、例から擧げて見ると、前代の、

雲の上になきゆく雁の遠けども君にあはむとたもとほり來つ

は「遠し」といふ爲めに「鳴きゆく雁」といひ、「雲の上」といひ、それで、二句を費してゐる。然るに、當時では、おなじ遠いことを、

あしべより雲間をさしてゆく雁のいやとほざかるわがみかなしも

と云ふ。遠いを云ふために、雁を持ち出し、それが、芦べから雲のまで飛ぶと云つて、遠距離を表する。それで、前者と同じ意に落ちるのであるが、前の二句と違つて、こゝでは三句を費してゐる。が、その長いものに、前者の急促

の態がなく、悠容の趣があり、前者にない、聲調の流滑の妙が、後者にある。であるから、効果はたしかに三句の後者に存するのである。この類を挙げれば猶あるが、これが三句のものを多くした主要原因であると思ふ。

序詞に、上述のやうに長いものが比較的多くなると、本義の發露が十分でない憾が出て來るので、こゝに、それを填補する、手段として、序詞を本義に對して、必然的關係のあらしめるやうにすることを始めた。前代には、序詞はたゞ序詞で、本義と些かの關係があれば、それで足れりとした。乃ち、「あしびきの山どりののをのしだりをの」は、「長々し」を、いふ本義の一句に關係を有すればそれで足れりとした。「我妹子にあふ坂山のしのすゝきはにはさきいですこひわたるかも」も、あるにはあるが、極めて少ない。然るにこの時代には、

手もふれで月日へにけるしらま弓おきふしわれはいこそねられぬ

の如くいふ。戀のため夜眠られぬといふのを、弓の術語の「起臥」からいふ。それで「白眞弓」をもち出す。その弓は手を觸れずして月日をへてゐるといふ。從來ならば、これだけで十分であるのであるが、その間に、弓に手を長く觸れないのは、戀の煩悶の爲だといふ。而してそれが強く、夜寝られないに響く。更にまた、その「い」は、「射」と「寢」とに懸詞となつてゐて、いよ／＼親密の度を増してゐる。かういふ事は、前代には殆んどなく、こゝに多いのである。全體の統一は、これで前代よりもよく出來てゐる。で、この數は十一を數へ、百分比數も十一であるから、この發展は注意すべきである。

位置から見ると、前代の序詞は、第一句から第三四句に及ぶものが多かつた。をり／＼中途にあらはれたものもあつた。ところが、この時代には、大抵第一句から現はれて中途に現はれるものはないが、よく見ると、さうでないも

のも少なくない。それは、前に述べた懸詞の關係によるものである。

君をおもひ沖つの濱になくたづのたづねくればぞありとだにきく

の第一句の「君を想ひ」は「置く」と「沖」と、懸詞によつて第二句の「沖つの濱」に連なつてゐる。第二句はもとより第三句に連なつてゐる。で、第一二三句は、一連となつて三句に接して、序詞を造つてゐるのであるが、前代の風にすれば、「君を想ひ」は第二句に續かず、第四句の「尋ねくれば」に續くべきであり、「沖つの濱になくたづの」は、中途に出現した序詞となつてしまふであらう。であるから、「沖つ」と「想ひ」と連ねた事は、こゝでは大事である。前代では、懸詞の利用に疎かつたから、これを大事にせず、「沖つの濱」は、「田結の濱」でも「田子の浦」でも、時と處に應じて用ゐて、外は殆んど構はなかつた。この故に、當時は、瞥見すれば、中途出現の序詞は少なくはないのであるが、懸詞の關係によつて、以上の結果となつたのである。これも統一に向つた一進歩とみてよからうと思ふ。すでに述べた懸詞は、當時に於いて甚だ多かつた。そして、他の種類を皆壓してしまつた。しかし、それも單獨に行使された場合であつた。これを、他の種類の、枕詞、序詞と連ねて考へて來ると、いづれにも、密接な關係をもつてゐる。これらを悉く算し來ると、一層の數を加へるのである。これらは、その場合／＼に記しておいた通である。それに加ふるに、今述べた類を加へると、更に一層を加へる。これらによれば、上代を譬喩の時代、奈良朝を枕詞の時代として、當時を懸詞の時代と、更に強く述べてよからうと思ふ。

所定の紙數は盡きた。重要とすべき種類は述べ終つた。しかも猶、擬人、反覆、引喩、對照の三種が残つてゐる。これらを述べることは、すでに出来ない。たゞ古今集中、百三十一の擬人が百分比數十三、六十二の反覆が百分比數

六、五十四の引喩が百分比數五、三十三の對照が百分比數三であつて、いづれも少數に止まり、擬人以外、殆んど前代の繼承に止まることを記しておく。(終)